

禪の「挨拶」—「あいさつ」の発生（2）

● 高 橋 六 二

はじめに

これは本誌・創刊号（平成19年3月刊）の拙稿の続編である。そこでは「あいさつ」が禪家の用い始めたことばであり、問答を基本とするものであったことを見てきた。しかし「あいさつ」の実際や内容は具体的には取りあげられないままだった。今それを明確にしうるというわけではないが、知りえたことを提示して、考察を進めてみることにする。

1、『碧巖録』の事例から

「挨拶」の用例としてよく引かれる『碧巖録』は前稿でもふれた。中国・北宋の雪竇重顕（980—1052）の編著『雪竇頌古』に圓悟克勤（1063—1135）が垂示・著語・評唱を付したものである（岩波文庫本・解題）。たとえば「挨拶」の用例を岩波文庫本の訓読文によって示すと、次のごとくである。ふりがなは適宜省略した。

第二三則 保福の妙峰頂

垂示に云く、玉は火をもつ将て試み、金は石を将て試み、劍は毛を将て試み、水は杖を将て試む。衲僧門下のうそうに至っては、一言一句、一機一境、一出一入、一挨拶⁽¹⁾に深淺を見んことを要し、向背を見んことを要す。且く道え、什麼しばらを将てか試みん。請う拳し看ん。

これを末本文美士編『現代語訳 碧巖録』上（岩波書店 2001年刊）は次のように訳している。

玉は火で（真贋を）試し、金は石で試し、剣は毛で試し、水は杖で試す。禅坊主の一門では、一つ一つの言葉、一つ一つの動作、一つ一つのやりとり、一つ一つの切り込み⁽²⁾で、（悟りの）深浅を見きわめようとし、正しく向いているか、背いているかを見抜こうとする。さて、何によって試すのか、取り上げてみよう。

そして以下に続く本則から評唱までを、やはり『現代語訳 碧巖録』上によって示すと次のようにある。長い引用になるが、内容を理解するためには必要と考えたので、あえて略さなかった。アンダーラインを引いた部分は「挨拶」に関係するところで、(1)の現代語訳が(2)であり、(3)の原文は「遁相挨拶」であり、語釈に「遁相」はたがいに、「挨拶」は切り込む、鋭く問い詰める、意だとある。

【本則】

保福と長慶が山歩ちやうけいきをしていたとき、〔この落ちぶれた二人め〕保福が指さして言った、「まさしくここが妙峰の頂きだ」。〔平地に土を盛った。地を掘って深く埋めるなどと、決して言うな〕長慶が言った、「そうではあるが、惜しい」。〔鉄や銅のようにしっかりした眼を持たなければ、すんでのところで惑わされていた。同病の者が互いに憐れんでいる。二人をひとつ穴に埋めてしまえ〕雪竇が著語して、「今この連中と山歩きするとしたら、何をめざしたのか」。〔なかなか二人の威厳をおとしめたが、もうちょっとだ。傍の人が剣に手をかけている〕さらに言う、「百千年後にも（こう言える人が）出ないとは言わぬ。だが少なからう」。〔ひけらかすな。雲居山の羅漢だ〕

(二人は) 後に鏡清きやうせいに呈示した。〔良い所も悪い所もある〕

鏡清せんこう「孫公(長慶)でなければ、髑髏が野を覆っていただろう」。〔同行した者だけがわかる。大地ははてしなく広がり人をひどく寂し
がらせる。奴隷は女奴隷には親切だ。もし、臨濟りんざいや徳山とくざんがやって
来たら、(お前は) 棒をくらうに違いない〕

〔評唱〕

保福と長慶と鏡清はみな雪峰の教えを受け継いだ。その三人はともに悟りを得、ともに学び、ともに実践し、互いにやりとりし、互いに切り込みあった⁽³⁾。彼らは同じ生を生きた人だったから、取り上げれば勘どころがわかったのだ。雪峰門下でふだん問答するのはその三人だけだった。古人は日常の立ち居ふるまい全てにあってこの重大事を心にかけていたので、取り上げれば勘どころがわかったのだ。

ある日、山歩きをしていたとき、保福は指さして「まさしくここが妙峰みょうほうの頂きだ」と言った。今の禅僧はそう問われるや、口をへの字に結んで黙りこんでしまう。

さいわい問うた相手が長慶だった。さて、保福がこう言ったのは何を目指したのか。古人はこのようにして(重大事を見抜く)眼があるかないかを試そうとした。(長慶も) 同門の人なので当然勘どころがわかって、彼に答えた、「そうではあるが、惜しい」と。さて、長慶がこう言ったのはどういう意図なのか。ひたすらこのようにやっていくことはできない。似ていることは似ているが、(長慶のように) 悠々閑々として何ごともないのは極めて稀なことだ。さいわい長慶は保福をしかと見抜いていた。

雪竇が著語して、「今、この連中と山歩きをするとしたら、何をめざしたものか」と言った。さて、その勘どころはどこにあるのか。さらに言う、「百千年後にも出ないとは言わぬ。だが少なからう」。雪竇が胸うぬほをさして自惚れることができたのは、ちょうど黄檗おうぼくが、「禅

がないとは言わない、ただ師がいないのだ」と言ったのに似ている。雪竇がこう言ったのは、なかなか峻厳だ。もし同じ音同士共鳴するようであれば、どうしてこのように切り立って近寄り難いものになるのか。これを著語と言い、双方について言っている。双方について言っていないながら、双方いずれにも留まっていないのだ。

後に鏡清に呈示した。鏡清は「孫公でなければ、鬮髻が野を覆っていたら」と言った。孫公とは長慶の俗姓である。(ある)僧が趙州じょうしゅうに問うたではないか、「妙峰の絶頂とは何か」。すると、趙州は「わしはこのことをお前には答えない」と答えた。僧が「なぜ答えないのか」と問うと、趙州は「もしお前に答えたなら平地に留まってしまうからだ」と言った。

経典では「妙峰の絶頂とくうんびくの徳雲比丘はこれまでずっと山から下りなかった。善財童子ぜんざいどうじがそのもとへ行っても、七日間会わなかった。ある日、別の峰で会った。会ってからは童子のために、一念三世の一切諸仏による智慧光明と普見法門を説いた」と言っている。徳雲は山を下りていないのに、なぜ別の峰で会ったのか。もし彼が山から下りたというなら、経典に「徳雲比丘はこれまでずっと山から下りず、常に妙峰の絶頂にいた」とある(のはどうなるのか)。それなら徳雲比丘と善財童子は、いったいどこにいるのか。

後に李長者りがうまく言葉で説明して、「妙峰の絶頂とは、一味平等法門である。一つ一つ全てが真実であり全体であって、得失も是非もないところにひとり現れる。だから善財童子は会えなかったのだ」と言った。

本性と一つになった境地に到れば、眼は自らを見ることなく、耳は自らを聞くことなく、指は自らを触ることがないかのようであり、刀は自らを切らず、火は自らを焼かず、水は自らを洗わないかのようである。

ここで、経典は極めてねんごろに教えている。だから一筋の道を

つけ、第二義の立場で相手と自分を対立させ、身体の働きを用いたり問答を用いたりした。そこでこう言っている、「諸仏は世に現れず、涅槃もない。方便で衆生を救おうとこのような事蹟を示したのだ」。

さて、一体どうやって鏡清・雪竇がこう言ったことから逃れられるか。即座に打てば響くように応ずることができなかったので、世界中の人の髑髏が野を覆った。鏡清はこのように悟り、あの二人もこのように活用した。雪竇は次の頌でさらにはっきりとさせた。

【頌】

妙峰の絶頂に草が美しくしげり、〔身体もろとも潜りこんでしまう。

足の下（の草）はもう数丈の深さだ〕

はっきりと取り出して誰に渡すのか。〔何をしようというのか。世界中のだれも知らない。乾いた糞が何の役に立つか。鼻をつかまれた上に、口まで失った〕

孫公が肝心なことを明示したのでなければ、〔誤ったぞ。（長慶の放った）矢を見ろ。賊にしてやられたことに気付いていない〕

髑髏が地にあふれていたことを、何人の者が知っていたらうか。

〔もう生き返らない。麻の実や粟粒のように数が多い。お前さんは鼻をつかまれた上に口まで失った〕

【評唱】

「妙峰の絶頂に草が美しくしげり」、草の中に転がればいつ終わるとも知れない。「はっきりと取り出して誰に渡すのか」とあるが、どこがはっきりしているのか。保福が「まさしくここが妙峰の頂きだ」と言ったのに頌をつけたのだ。「孫公が肝心なことを明示したのでなければ」。孫公はどんなわけでこう言ったのか、「そうではあるが、惜しい」と。「髑髏が地にあふれていたことを、何人の者が知っていたらうか」とあるが、さてお前たちは知っているか。めくらめ！

冒頭の「垂示」は圓悟の問題提起、次の「本則」「頌」は雪竇の提示、「評唱」は圓悟の解説・論評、〔 〕内はその著語（短評）だという（岩波文庫本・解題）。だからこの第23則を理解するには「評唱」がわかりやすい。それによれば、雪峰義存（822—908）の教えを受けた保福從展（？—928）と長慶慧稜（854—932）、そして鏡清道愆（868？—937）三人の問答、悟りのさまを示したのがこの話である。

保福が山歩きをしていて「まさしくここが妙峰の頂きだ」と言ったのに対し、長慶は「そうではあるが、惜しい」と言った。二人が後に鏡清に呈示したところ、「孫公（長慶）でなければ、鬮髯が野を覆っていたら」と言った、というのである。現代の常人の会話からみたら、なんとも奇妙な受け答えである。しかしこれが禅僧の問答なのだろう。

このとき重視しているのは「勘どころがわかる」「見抜く」ということであるようだ。それができるようになるために、三人はともに、悟りを得、学び、実践し、また互いにやりとりし、切り込みあった、というのである。その原文表記は「他三人同得同証、同見同聞、同拈同用、一出一入、通相挨拶」となっている。これからすると「通相挨拶」は「一出一入」と同じレベルの表現だということになる。さらには「垂示」の「一言一句、一機一境、一出一入、一挨一拶」もまた同種の表現だと言ってよいだろう。そしてそこには、禅坊主の入門はこれによって悟りの深浅を見きわめ、正しく向いているか背いているかを見抜こうとするのだとある。そのひとつの例話が第23則だったわけである。

『碧巖録』には他に、

- 第2則 すなわ ゆ かれ さつ 便ち去きて佗を拶す（グサリと刺す。切り込む、追及する）
佗に拶著せられて
- 第4則 か る きり こ 軽軽く拶著めば
- 第7則 よ そ のうそう 門に挨り戸に傍う衲僧（門や戸によりかかる。主体性な

く、人に頼る者)

第17則 拶出して你に見るままにせしむ

第20則 龍牙は人の拶著むこと無くんば猶お可なるも、箇の衲子に
拶著られて

第35則 当時に便ち一喝を与えて、一拶に拶倒し了らん

第45則 この老漢に拶著む

何ぞ必ずしもこの老漢を拶著めん。拶拶して什麼処に向つてか去く (拶拶一鋭く切り込む)

この僧他の趙州に拶拶まんと要するも

第48則 拶著めり。也た好し一拶を与うるに

朗、拶んで云く

などともある (岩波文庫本による。括弧内はその傍注である)。つまり「一挨一拶」「挨拶」のほかに、「挨」「拶」「一拶」「挨著」「拶著」「拶出」「拶倒」などという語法が禅家にはあったということである。「拶出」はショックを与える、衝撃的な発言をする意だという (古賀英彦『禅語辞典』思文閣出版 1991年刊)。これと第7則「挨門」が他とやや異なる用法である以外は、みな同様な意で用いられている。

『碧巖録』は禅の教科書であり、中国で宗門第一書とも言われたという (岩波文庫本 解説・解題)。日本には古く道元の伝本もあるというが五山版が通行、古い注釈書も多数あるという。そして禅門の修行という観点から読まれ、今日でも、禅の道場で老師の提唱の講本として、また参禅の公案として用いられているという (『現代語訳 碧巖録』上・序)。すると「挨拶」ということばはもちろん、その意味する行為が広く禅家にあったことはじゅうぶんに推測できる。

2、日常語化への道筋

たまたま手にした田上太秀『禅語散策』(講談社学術文庫 2007年刊)

はわかりやすい本だった。その「第一章 日常語となった禅語」の「人間関係に関する語」冒頭は「挨拶」である。要所を摘記してみよう。

挨拶という語はもともと、大勢が押し合って進むという意味であった。「挨」は押し開く、近づくなどの意味があり、「拶」は迫るという意味があって、これが熟語となっている。このもとの意味から、人と人とのいろいろな関係を表す用語として用いられるようになった。たとえば社交儀礼、仲介、交際、付き合いなどを意味する語として、挨拶の語は禅宗では一挨一拶いちあいいっさつという語句が多用された。

これは弟子の心境の深淺を試み、かれの器量を知るときのことばである。肌に触れないで、心で心を読むのが挨拶である。師が弟子の、あるいは同じ修行仲間の禅僧同士が相手の心の深さや考えなどを付度そんたくしたり、検査したり、また弟子に、あるいは相手に応答を迫ったり、さらには自分自身の考えを披露したりすることを挨拶といっている。

『碧巖録』二十三則に「一言一句、一機一境、一出入、一挨一拶」という形で用いられている。言葉を投げかけ、相手の心境を試験し、その相手の言動に応じて緩急自在に対処しながら、挨拶をするところをいったものである。

相手がこちらの挨拶に対して応答ができないようなことがあれば、棒喝ぼうかつが加えられる。詳しくは弘拳棒喝ほつけんぼうかつといい、弟子を教育するときに用いる四種の方法が行われる。

やはり『碧巖録』第23則によって説かれている。「心で心を読むのが挨拶である」というのは、なかなかすぐれた指摘である。ただ気になるのは「たとえば社交儀礼……一挨一拶という語句が多用された」という部分である。「一挨一拶」にも「社交儀礼、仲介、交際、付き合いなど」を意味することがあるのだろうか、という疑問があるからである。先に

見た事例からは、そのような意味は感じとれない。他の用例にそれがあ
るのだろうか。沖本克己・竹貫元勝『これで大丈夫 禅語百科』（淡交社
1998年刊）には、「一拶」に、

拶は押すこと。相手の境地・力量を確かめること。一拶一挨とも
いう。転じて日常の挨拶のこと。挨拶も禅僧の出会い頭の間答が原
意。

とある。また中村 元『佛教語大辞典』縮刷版（東京書籍 昭和56年刊）
に、

【挨拶】 あいさつ ①軽く触れることを挨といい、強く触れることを
拶という。②禅宗の語。師家が問答をし、雲水のさとりをためすこ
と。③転じて、応答。返礼。④儀礼・親愛のことば。また、それを
述べること。

とある。③④も仏教語、わけても禅語の中のことであれば問題はないの
だが……。

さて、禅語の「挨拶」はどのようにして日常語化してきたのだろうか。
禅家の生活に日常語化した「挨拶」があったのであれば、それが常人の
間にも一般化したということは考えられる。たとえば、『禅語散策』に
は次のような例話がある。

喫茶去きつ さ この精神を教える公案に次のようなものもある。
天皇てんのう（748—807）と龍潭りゅうたん（生没年不詳）とは師弟の関係である
が、この二人の間で交わされた問答がある。

龍潭「師のもとに来てから一度も心の修行について教えを受け
たことはありません。どうか今日は教えてくださいませ」

天皇「そうかな。私はいつもいかに心の修行をするべきかを教えてきたつもりだが……」

龍潭「どんなふうにでしょうか」

天皇「きみが茶を持ってくれば、私はそれを飲み、食事を持ってくれば、私はそれを頂いているではないか。きみが挨拶をすれば、私は返礼しているではないか。これでも私はきみに何も教えていないとでもいうのか。出会ったならば立ちどころにそれを見なさい。見るのであって、それについて考えようとしてはなりません。考えたらそのときに、それはきみのまえから消えてしまうでしょう」

この公案を「^{ぐう きっさ}遇茶喫茶」（茶に遇っては茶を喫す）の公案という。

これは中国の話である。出典に当たれないので原文表記がどのようになっているのか不明だが、「きみが挨拶をすれば、私は返礼しているではないか」の「挨拶」「返礼」は、明らかに日本の日常語化した「挨拶」のあり方とってよいだろう。こういう「挨拶」が日本の禅家でも普遍的にあったのなら、ここにこだわっていることは問題にならないのだが、それは後日の再検討に任せることにしたい。

ここで古辞書を少し見ることにする。

挨拶 ヲス・ヤカラ・タグヒ・アツム（類聚名義抄）

挨拶 ヲス・サツク・アツム・ヤカラ・タグヒ（字鏡集）

挨拶 セム・サル（字鏡集）

南去ノ雁札、北来ノ鯉緘、^{アイサツ}酬答辞ニ富ミ、挨拶便りヲ得タリ（下学集 卷上・序）

^{アイサツ}挨拶 ^{挨拶トハト}ハト^{ハト}リツメル意（節用集）

^{あいさつ}挨拶 [○]挨拶とハゆるくなつる心也[○]挨拶とハとりつむる心也（和漢通用集）

Aisat. アイサツ（挨拶）客を歓待して、言葉の応待をすること。

Aisatno yoifito. (挨拶のよい人) 手厚いもてなしをし、気持ちよく言葉の応待をする人。(日葡辞書)

『類聚名義抄』は永保元(1081)年以後、11～12世紀に成立、法相宗の僧の著かという。また『字鏡集』は寛元期(1243-47)の、菅原為長(1158-1246 儒学者)の著という。白川静『字通』『字統』には、「挨拶」は『説文』十二上に「背を撃つなり」とあり、「拶」は『説文』にない字だが、手でおす動作をいう、として「挨拶」は「禅家の用いる語。衆をおしのけて前に進み出ることをいう語であった」とある。

『下学集』は室町時代の国語辞書。著者は序文末尾に「東麓破衲」とあり、建仁寺の僧かともいうが不詳。文安元(1444)年に成ったが、元和3(1617)年に刊行された。古辞書叢刊『元和三年板 下学集』(新生社 昭和43年刊)により、返り点・送りがな・読みがな付き漢文表現を訓読文にして引用した。この「挨拶」を『時代別 国語大辞典 室町時代編一』(三省堂刊)は「㊟手紙をやりとりする上で使う言葉」とし、『日本国語大辞典』第2版(小学館刊)も「㊟手紙の往復、応答のことば」の一資料としている。

『節用集』は室町時代中期頃から諸種著された国語辞書である。古本節用集のうち文明本『節用集』(文明期1469-87)に「挨拶 アイサツ」とあり、『日本国語大辞典』第2版は「㊟禅宗で、問答によって、門下の僧の悟りの深浅をためすこと」の一資料にあげている。上に引用したのは大谷大学本『節用集』で、字意が示されている。『和漢通用集』は中田祝夫ほか編『印度本節用集和漢通用集他三種 研究並びに総合索引』(勉誠社 1980年刊)所収の東京大学国語研究室蔵本の写真複製によっている。大谷大学本『節用集』の内容と共通している。『時代別 国語大辞典 室町時代編一』は「㊟仏教語。禅宗で、門下の僧と押し問答して、その悟り・知見の程度をためすこと」の資料としてこれらをあげている。

以上によってみると、「挨拶」が禅家で日常語化していたかどうかは、

やはり不明である。しかし『下学集』の例は、書簡の取り交わしにおいては、これがすでに禅家を離れて日常語化して用いられているものだといつてよいだろう。『日葡辞書』（慶長8〈1603〉年刊）のは明らかに常人の日常生活の中での例だ。『時代別 国語大辞典 室町時代編一』はこれを「㊦人との応対における、言葉や動作」の資料としており、そこには次の2例も挙げてある。

細河武州の御前にて、当道の中に、礼を申ける時、「かゝる尾籠の者はなき」と仰せける也。人の挨拶大事なるべし。（申楽談義）

大人俄に御立より有時は。建蓋の天目など近き比ほり出すなどゝいひ。愛^{あいさつ}拶して御茶を進上有事然るべし。あながち天目にあらずとも。

時の興にさやうの仕合
しかるべし。

（喫茶雑話）

『申楽談義』は日本古典文学大系本『歌論集 能楽論集』により、『喫茶雑話』は『続群書類従』第19輯下により補足して示した。『申楽談義』の例は、猿楽の最中に礼を申したのが不作法だと細河殿がおっしゃったことから、挨拶のしかたの大事さを言ったもの、『喫茶雑話』のは「愛」は当て字、茶を勧めるときの挨拶

北宋	960~1127
	雪竇重顕 (980-1052)
	圓悟克勤 (1063-1135)
平安	1081 (永保元) 以後 『類聚名義抄』 1125 『碧巖録』
南宋	1127~1279
	1187 (文治3) 栄西、入宋。
鎌倉	1202 (建仁2) 栄西、建仁寺創建。 1215 (建保3) 栄西、示寂。 1223 (貞応2) 道元、入宋。 1243 (寛元元) ~47、『字鏡集』 1244 (寛元2) 道元、永平寺創建。
室町	1430 (永享2) 『申楽談義』 1444 (文安元) 『下学集』成る。 1469 (文明元) ~87、文明本『節用集』
江戸	1603 (慶長8) 『日葡辞書』 1620 (元和6) 『喫茶雑話』

のしかたを言ったのであろう。これらは確かに人との応対のしかたをいうもので、いわば日常語化した挨拶の用法とあってよいだろう。それでも観能や茶道での礼儀・作法についての例であることは、それらの禅との関わりを考えると興味深い。つまり「挨拶」が禅の世界から一般社会に浸透していく道筋のひとつは、こうしたあり方をしていたのかもしれないという予測がたったからである。もうひとつ、これまでにあげた資料を年表化して気づいたことであるが、禅の「挨拶」が日常語化していくのは意外と速いこと、それでいて『節用集』の説明が遅くまでであるということ、である。

おわりに

なかなか不確かなことも多いのだが、それでも、禅の「挨拶」の様相は少し見えてきたし、その日常語化への過程も目安が付いたように思う。その検討は次回に続けたい。